

編集委員会から

粗悪学術誌

前回の続きと言えないこともない話です。

毎日新聞 9月3日(月)に“<粗悪学術誌>論文投稿, 日本 5000 本超 業績水増しか”という記事が掲載されています。インターネット専用の学術誌)の中で、質が十分に保証されていない粗悪な「ハゲタカジャーナル」¹⁾(オープンアクセスジャーナル²⁾)に日本からも多数の論文が掲載されているという内容です。また、この種のジャーナルは名称だけでは判定がつかず、さらに年々増加しています³⁾。

いままで編集委員会からではオープンアクセスジャーナル(OAJ)について何回か紹介しました。もちろん、OAJ=粗悪学術誌ではありません。審査システムが機能していないということで粗悪学術誌と呼ばれています(ほぼ無審査で掲載している事例が多い)。日本食品工学会誌は、複数の査読者による複数回の審査を実施しています。ただし審査システムがあったとしても、それで十分でないことは、昨今の論文取り下げの事例を見ればあきらかです。査読者も、著者を信頼して審査をします。OAJが悪ではないと述べましたが、問題になっている粗悪学術誌は印刷冊子体を有せず、電子ジャーナルとしてネット上でのみ公開しています。冊子体発行には、費用がかかるので成立しないと思われまます。また、学会誌であれば、その質に責任をもつであろうが、発行者(組織)がそもそも信頼ののではないかという意見もあります。一方で、前に紹介したメガジャーナルのようにOAJであることに立脚して、既存の学術論文誌とは異なる観点で論文を審査評価して掲載している学術雑誌もあります。

日本食品工学会誌は日本食品工学会の学会誌として学会会員をはじめとするこの分野の貴重で有用な研究成果が公表される学術雑誌です。学会が出版していない海外学術雑誌より高いステータスになるように努力していきますので、ご協力をお願いします。

- 1) “predatory journals” と称され、predatory (略奪) からハゲタカジャーナルとして訳されたようです。しかしネット上で検索するとサメのイラストが多いので人食いサメジャーナル(ジョーズジャーナル?)のほうがよいかも(サメのイラストをヒントに私が作成したのが右図)
- 2) 「掲載料を払うこと自体がふつうではない」というコメントがweb上で散見されます。前にも指摘しましたが電子ジャーナルができる以前は海外雑誌も掲載料が必要でした。現在でもほとんどの国内学会誌は掲載料を設定しています。
- 3) この種のジャーナルは過去数年に急増し、学術雑誌総数の10%以上に到達しているとも言われています。



(“いらすとや”の素材を利用して作成)

(山口大学 山本修一)